

セツ ぶん

No.80



ひ と 言

「教育バカ」の悔い

春日 辰夫 (センター運営委員)

目次

ひと言	春日 辰夫	1
特集	戦後70年「戦争と平和」に向き合う高校生	2
	佐藤 将希/薄井 彩香/伊藤 研二	
	中塚 友哉/三浦 瑞樹/長谷川健太	
	顧問として活動をふり返る	12
	安保 健/下村 由夏	
3・11 震災シリーズ		
	みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい	13
	特設分科会 参加者感想	
子どもと学校		
	詩の授業から	伊野 文子 14
おすすめBOOK		松尾 福子 16
教育時評		
	「政治的中立」と学習の自由—「九条俳句」事件	
		高橋 満 17
報告	フォーラム「子どもたちの今と未来を考える」	
	PART VII みやぎが不登校率全国一なのは どうして?	
	「みんなの学校、になるために	須藤 道子 18
わたしの出会った先生	10	
	鬼の家の電話番号	早坂百合恵 21
相談活動を通して思うこと		松谷三喜子 22
おすすめ映画		長住 康博 24
センターの動き		24

仕事部屋の机上には、いわゆる教育書は1冊ものついでいません。今積んである山に見える書名をあげると「山頭火の手記」「レイテ戦記」「読むということ」「昭和史世相篇」「いのちの重み」など雑多です。すべて決まった目的のためのものではありません。

この部屋で、ある日、突然過去の仕事のことが浮かんできました。

それは、現職時代、子どもたちをどれだけトータルにとらえて真向かったらうかという自分の仕事への疑問でした。この机上の書物たちが私へ仕掛けたのでしょうか。

私は家人から呆れられたほど「教育バカ」でした。いろいろの学びでよかれと思えばそれを子どもに伝えることにただ懸命で、子どもたちが人に育っていくために何が必要でそれを伝えるためにはどうすればいいかをていねいに考えることなく、どう教えるかだけに夢中だった自分を思い出したというわけです。その後の研究センターの仕事もその延長上だったと言えます。

「教育」と言われるものの中にどっぷり浸かりつづけたのです。それは何がどうあれその狭い枠内での「教育」は広く柔軟にもの考える子どもを育てる仕事を創ることにならないことを今読みまくっている本がささやいてくれたようなのです。「教育」から身を離れたことでやっと気づくのですから、真正正銘の「教育バカ」だったのでしょうか。

特集

戦後70年 「戦争と平和」に向き合う高校生

参加者 名取北高卒業生（現大学1年）

佐藤 将希（回天の特攻兵役）

薄井 彩香（恋人役）

仙台工業高3年生

伊藤 研二（取材・聴き取り担当）

中塚 友哉（編集担当）

三浦 瑞樹（取材・記録写真担当）

長谷川健太（ナレーション担当）

題材（テーマ）が決まるまでの経過

— 名取北高校は、「父を騙す」というタイトルのステージでしたが、この題材を取り組むことになった経過、また顧問の安保先生といういろいろ相談もあったかと思うけど、そのあたりから聞かせてもらえますか。



佐藤 安保先生のお父さんが蛟竜こうりゅうという海軍の特殊潜航艇に乗っていたそうなんです。それを安保先生が伝えたかったということ、それいいじゃないですかとこのこと、

良かった形です。特に僕たちからこれをやりたいということではなかったんですよ。

— 最初に提案を受けた時に、即、いいじゃないとなったの。

今年が戦後70年。テレビや新聞でもこの8月はいろいろな特集が組まれている。

そのような年に、名取北高校演劇部は、春期全国高校演劇研究大会に県の代表として参加。人間魚雷「回天」という海の特攻隊を題材として『父を騙す』を上演。命を落としていく当時の若者たち、そして生き残った人々を70年前と今を描き出しながら取り組んだ。

一方、仙台工業高校の模型部は、70年前の7月10日の仙台大空襲という大きなテーマをコマ撮りアニメの形で制作して仙台戦災復興記念館で上映を行った。

10代の若いみなさんがこのような重いテーマにそれぞれがどんな思いで取り組んできたか。また取り組みの中でそれぞれが感じたこと、考えてきたことを話してもらえるといいなと思い、両校のみなさんで座談会を企画した。

佐藤 僕たちがやって伝えるには、さうとう意味があること

だなと。先生が伝えたいことをイメージにして、それを僕たちに伝えてきて、それいいじゃないですかという感じでいつも創り始めます。



薄井 私もいいなと思いました。ただおもしろいだけじゃなくて、伝えたいこと、意味があることが劇になつているので、いいんじゃないかなと思いました。

— 70年前のことだから、脚本読んでも当時のイメージとかなかなか浮かばなかったと思うけど、さういう迷いはなかったの？

佐藤 ちよつと難しいなとは思いましたけど。安保先生がやる気になつている時はどんなことでもやり出すというのを

わかっていたので、先生について行けば何とかなるだろうという気持ちがありましたね。もちろん僕たちから自発的にいろいろやりますけど。ほんとうに困った時はお互いに助け合えるというか、助けてもらえるだろうと思って。



伊藤 最初に震災復興記念館から仙台空襲で焼けた街とかをジオラマで作ってくれないかという依頼がありました。それでお話を伺って、確かに模型部なのでジオラマもやるんですけど、今、僕たちが力を入れているのはコマ撮りアニメなので、それを活かした方がいいのではないかと先生などと話し合って、映像制作にしようということになりました。その方が今の模型部の力が出せるんじゃないかということになりました。

— 名取北は安保先生の言う通りやっていけばとにかく大丈夫ということを1年生の時から見えてきて、その信頼関係から。仙台工業は、外部からの依頼だったけど自分たちが今までやってきた財産を使ってこういう形でやるんじゃないかという、今までの財産があったからできただろうね。

70年前の時代考察の苦勞

— 今度は仙台工業の方から聞きたいんだけど、70年前と今とではまったく違って、当時の人の服装から町並みから、何にもイメージがないなかで始まったわけですね。当時の社会や場面をコマ撮りにしていく時に、どんなものを資料として集めたり、それに併せてナレーションはどんな台詞を考えたりする時に、参考にする資料なんかがあったと思うけど、そのへんの苦勞話など教えても

らえますか。



中塚 震災復興記念館から資料をいただいて映像にするわけですけど、けっこう大変だったのはたくさん写真があるなかから使える写真を選ぶのが大変でした。膨大な量の写真のデータから厳選して、その悲惨さをどう伝えしていくかを考えながら選ばなくてはならなかった。それがけっこう大変でした。

伊藤 これまでお話を伺って、それを一本の番組に制作することはやめたことがないので、どうすればいいかという話し合いをみんなでした。その時に、より実際に空襲に遭われた方の声を聞くために、空襲の被害に遭った場所を訪れると映像もわかりやすくなるのではないかと顧問の下村先生にアドバイスをいただきました。そこで聞いた実体験とか資料から、ここでこういうことになったとか、そういうことを書いて、そこからどこに行こうかと話し合ったりしました。

— みなさんの取り組みは、テレビでも紹介されて、町内会のおじいさんたちにインタビューしている様子も映っていたけど、あの方々は震災復興記念館の方から紹介されたの？

伊藤 そうです。震災復興記念館の方から「仙台の震災・復興と平和を語り継ぐ会」というみなさんがいらつしゃって、その会長さんと、その会のメンバーの方それぞれにお話を



伺いました。

— 実際にインタビューをして話を聞いて、長谷川君なんかはどうでしたか。



長谷川 逃げていた時に、赤ん坊を抱っこしたそのままの姿で母親が焼け焦げて真っ黒になっていたという話を聞きました。マンガとか物語では聞いたことはありませんが、実際にそんなことがあったんだということを改めて思っつてショックを受けました。

— 空襲に遭った人たちの場所も見に行つたそうですね。

それは具体的にはどのあたりになるの？

伊藤 会長の伊達さんの場合は、商工会議所前の三越の近くに元々ご自宅があつて、実際に車を出していただいてそこに行つてみたり、会員の川村さんは旧制二中、現在の仙台二高のところなので、そちらに行つて当時の話を伺つたりしました。川村さんの話では、当時二高の校庭を使つて畑を耕して大豆を育てて、その大豆を豆腐屋さんで豆腐と交換してもらつたと話を聞いたりもして、その豆腐屋さんが当時あつたところに行つたらそのまま建物が残つてたんです。それから川村さんと近くにある八百屋さんに行つたら、その八百屋の店主の方も実は空襲の体験者だということがわかつて、その時の話を伺つたり、また焼夷弾や手榴弾などの残骸も保存しておられて実際に見せてもらつたりもしました。川村さんと実際に行つてみなければ八百屋さんに会うこともなかったし、戦災復興記念館で展示されているようなものを直に触らせていただくことができて、すごく貴重な経験でした。

— 名取北高のみなさんも実際に「回天」の実物を見てき

たそうですね。

佐藤 見てきました。入つてはいけないの知らなくて中に入っちゃいました。内部は真っ暗でした。

— 実物の「回天」は、劇で作つたものと同じぐらいの大きさなの？ ほほ原寸？

佐藤 乗るところのスペースは

同じサイズですけど、長さはもつと倍ぐらいの長さです。

— でも劇で作つたものを香川まで運んだんでしょ。大変でしたね。

佐藤 運ぶことを考えて3つ、4つに分解できるようにつくてあるんです。

— やっぱ写真とか文章で読むのと、焼夷弾とか手榴弾とか実際に破裂した残骸だけであつても、こういうものが空から無数に降つてきたということをイメージしたら全然違つてくるよね。回天も内部に入つてその空間を体感する。コマ撮りや演劇をつくつていく時のイメージ作りとして、とても有効だったろうなと思うね。

戦争体験を聞く機会は

— みなさんに聞きたいんだけど、今回の取り組みをするまでに戦争の体験について自分のおじいさんおばあさんなど身近な人から話を聞いたことはある？ 例えば、夏



休みの宿題でとか？



三浦 ぼくはありません。祖父は戦場には行っていないんですが、ご飯を食べる時などに、「ご飯をこうして毎日食べられるのは幸せなことだ。当時なんかは全然食べられないかった」というような話をしてくれました。それから、戦闘機とかが飛んできてすごく怖い思いをしたとか、そういう話を聞きました。

長谷川 父方の祖父から聞いたんですけど、秋田で鉄道の工場があったのでけっこう空襲がひどくて、母親と防空壕に逃げたら、そこはいっぱいだから他所に行けと言われて、他の所に逃げたそうなんですけど、次の日に、その断られた豪に行ってみたら爆弾が直撃してて、そこに逃げなくてよかったです。命拾いました、ということがあります。

— 日本の主要都市が空襲を受けるけど、秋田の空襲は一番最後で、もう終戦直前、確か8月14日かな。

長谷川 そうなんです。

— 最後のB29の焼夷弾が落とされたのが秋田だから。みんなと同じところに逃げてたら、今そういう話も聞けなかったという。逆にそこにいなくて、命拾いましたという。そういうこともあるよね、人生の中でね。

完成までのひきこり

— 作品を作り上げる取り組みの中で、いろいろなやり取りとか考えたことかあったら、もう少し聞かせてください。

佐藤 戦争と一緒に戦いに行く仲間たち同士では、深刻な話はないというか、真面目な話はないような感じの仲

というか。戦争について考えたら嫌になっちゃうから、戦争のことはお互いに考えないという。劇をやっている時は、僕たちもそこに生きているという感じでやっているんですけど、お互いに深刻に戦争のことは考えないで、取りあえず、すてきな女性はいないかみたいな。戦争とは全然違うことを考えたりして自分の気持ちを紛らわしたりとか、特攻に行く最後には、死ぬことを身体は拒絶してしまうんだけど、それはいいことだと無理矢理思い込んで、敵に向かって突っ込んでいくんですね。その感じを出すのに、今のこの世界にはないような……思い込みの。何ていうんでしょうね表現できないです。ごめんさい。

— そういう思いやイメージを作っていくために、どんなことをしたの？

佐藤 やっぱいろいろ見ました。実際昔の人たちが戦争について語っている映像があったので、それを見てこういう感じなんだと当時のことをみたり、本とかもたくさんあって、実際に僕たちはあまりそれらを読めてはいないんですけど、先生が読んでそこから重要な部分を伝えてくれたりして、楽をしながら言ったらなんですけど知識を得て、イメージをつくったりしました。

あとは当時のことをテーマにした映画作品とかも見て、こういう演技しているんだと疑問に思ったりしたこと調べたりして、自分なりに考えました。



— 例えば具体的に？

佐藤 例えば、回天のなかの様子については調べてもなかなか出てこないんですよ。でも市川海老蔵主演の映画「出口のない海」には回天の中の装置とかが出てたので、操縦の際の台詞とか参考にしました。

「電気縦舵機機動・起動弁全開・ベント弁閉鎖・金氏弁閉鎖・縦舵機排気弁全開・操空塞気弁全開・縦舵機発動弁全開・安全弁全開・燃料中間弁全開・潤滑油導水弁全開・入力縦舵作動確認・海水タンク調節弁閉鎖・調圧口ツト作動確認・調深口ツト作動確認・特眼鏡作動確認・電動縦舵機固定装置解脱・電気縦舵作動試験・電動縦舵機ヨシ・傾斜計作動試験発進用意ヨシ」

安保先生は映画を見る前に独自に調べてたどり着いたものもあつたんですが、それは長すぎて、これは駄目だなと。一応それも劇の中では、登場する場面の時に使っているんですけど。最後の、回天に乗って出撃する場面の台詞の中には、海老蔵さんが映画の中で使っていた台詞を使わせてもらいました。

— 仙台工業の作品は、改めて手直しをしたと先生から聞いたんだけど、手直しはどの辺の部分なの？

中塚 クレジットがあるんですが、下の部分が切れてしまっていたので、その部分を直したのと、あとは新たに戦災復興記念館の木村さんと、八百屋さんで話をしていたいた高橋さんに、改めてお話を伺いたいということで「語り継ぐ会」の方ではないんですけどお話を伺って、新しく編集しました。

— 仙台空襲で街に火が燃え広がっていく様子を赤い旗を



市街地の地図の上にピンで立てて表現していましたね。
あの燃え広がり方は、どうやって調べたの？

伊藤 震災復興記念館の方から空襲を受けた場所の地図をいただいた。この部分は2年生がメインになって制作しました。あと、実際に炎をつくり、ボードに刺していつて、それで制作していきました。

— 今回の作品はインタビュの部分を除くと、コマ撮りの部分は何かコマなの？

三浦 だいたい6000コマです。

佐藤 えっ？ 6000回、撮ったりするんですか？

— そうだよ。ちよつと動かしてカチャ、ちよつと動かしてカチャって6000回撮るんだよね。すごい量だね。学年で、どんな分担をしたの。

伊藤 実際に話を聞いたのは、三浦君と僕で、そのコマ撮りだったりオープニングのコマ撮りは2年生が中心となって担当しました。

— それで、声や音を入れたんだ。それで編集は中塚君で、ナレーターが長谷川君だね。ナレーターで苦労したことある。

長谷川 1回目に行った時に声が低すぎて、バックの音に負けてしまったんですね。それでナレーションがあまり聞こえなかったんです。それで2回目は、声のトーンをあげるとか、抑揚をつけてなるべく聞こえやすいようにしました。— それはみんなでもモニターを見たりして、意見を言い合おうわけ？ ここもう少し大きくした方がいいよとか。

伊藤 そうですね。完成して、一応、間違いがないかとか、場面が計画通り変わっているかなど、みんなで確認をして、その上で先生や先輩も含めて話し合っつて、また改善をして



いく。そのことの繰り返しです。

— 僕はすごいなと思つたのは、アニメ映画なんかだと映像に合わせて台詞を終わらせなくてはいけませんよ。早くしゃべってもダメ、遅くしゃべってもダメ。その合わせ方って苦労するでしょ。

中塚 そこはけっこう苦労しました。

— ピタツとはまった時はいいよね。

中塚 はい、達成感がありました。

— 演劇とか、こういう物づくりはいろんな担当がいるじゃない。例えば演劇だったら照明とか音声とか、後はBGMとか、それから大道具、小道具。それもみんなどこちがいいとか話し合っつたりするの。

佐藤 僕らの学校は、大道具、たつたら大道具担当、照明、たつたら照明、音響、たつたら音響という感じで分かれちゃつているんですね。

— それは、演劇部に入った時に、大道具をやりたいとかいう形で入ってくるという意味？

佐藤 違います。僕、たと役者をやりながら回天を作つていたりとか、けつこ兼業はするんですけど一応担当がいます。音響とかだと役者はできないんですけど、1年生の時は役者をやつていたけど、やつぱり音響をやりたいとなれば音響にいつてもらつて、音響を担当してもらつたみたいな感じ

仙台炎上再現

でやつてます。

— 因みに彩香さんは、役者の他には？

薄井 私はもう役者だけです。役者専門です。

— いろいろな衣装なんか、けっこう縫ったりしたのかな
— と思ったんだけど。

薄井 あれば、一つ上の先輩のOGの方が教えてくださって、
みんなで作ってみたいな感じです。

佐藤 僕が着ている軍服とかは、全部サイズを測って特注で
作ってくれたんです。

— 本場にシンプルなステージでした。物の配置としては、
基本的には回天が出てきて、白い踏み台とご飯のお膳た
けだから。そして広い空間の中でバランスよく上手と下
手を使ってるよね。

佐藤 なるべく舞台装置は無駄な物を使わないようにして
て、舞台装置としては基本使える物という感じです。雰囲気
気づくりのための装置とかはあまり置かないようにしてた
んです。

— 仙台工業の方は、取材と写真を選んでどれとどれを使
うかということ、あと台詞は誰が考えたの。

中塚 大体僕が考えました。シナリオというか、いただいた
資料を参考にして死者が何人だったか、それらのデータを
もとに考えて文章にしました。

— けっこう時間かかった？

中塚 2、3日は考えました。

— あれだけのもの、そんな時間で済んだの？ すごいな
あ。

中塚 ナレーションと言っても、だいたい20から30ぐらいで
あまり多くはなかったの、それ自体は、あまり時間はか

からなかったんです。

— 空襲の取り組みで、今回とても苦労したり、みんな
議論になったりしたところはどの辺なんだろう。

伊藤 やっぱり話を聞くところかな。実際に空襲に遭われた
場所に行つて取材したりとか。その日以外にも、空襲の時
の話とかも聞いて、いかに話を引き出せるか。そういうこ
とをしたことがあまりなかったの、どんな質問をしたら
いいかとか、どう話をしたらいいかとか、今回の映像の一
番のメインなので、そこはけっこうみんな話合ったり
して、時間がかかりました。

— 行く前に、いろいろこういう質問をしようかとか？

伊藤 そうですね、手記を事前に拝見させていただいたので、
それをもとにもう少しこは詳しく聞いてみようとか考え
ました。また最初1回会っただけはすべて聞き出せるこ
とができなかったの、後日戦災復興記念館で改めてお話
を伺ったり、けっこう話はたくさん伺いました。

— 仙台二高の方にある八百屋さんなんかも？

伊藤 そうですね、戦災復興展という展示会で模型部がつ
くった映像が流されてて、そこに見に来て下さって、この
ままここで話を聞いた方がいいだろうという話になりまし
て、その場で伺いました。

— 名取北高の方はどうか？ 一番苦労したところとい
うのは。全体を通して自分だけではなくて、みんなが一
つの物をつくって完成させるまでに。

佐藤 演技のことで言ったら、一緒に特攻で出陣する平田と
横田が話をしてて、後からやはり特攻隊員の関が入ってき
て、特攻に行く僕らを動揺させることを言う場面があるん
ですけど、その関役を1年生がしたんです。その関の台詞

というのは、すごく重要なもので、そこは全体として苦勞したんじゃないかなあと思います。

— どういう台詞かというと、関が「敵艦に当てる確率は針の穴に目をつぶって糸を通すようなものじゃないか」。すると今から回天に乗ろうとしている平田は「貴様何を言う。それでも通すのが俺たちじゃないか。何のために命をかけて練習してきたんだ」と。関は「俺は回天に志願した。俺は志願してから考えた。どうして俺が回天に志願したかだ。俺はわかった。俺は回天志願するように教育された。回天の志願を断れないように教育されてきたんだ。横田、わかるか。国のために死ぬことが当たり前だと教育されてきた。それ以外考えさせないように教育されたんだ。だから俺たちは回天の志願を断るのが卑怯者で、臆病者だと思われたくない」という。そういう台詞だよ。要するにここは、当時の君たちと同じくらの世代の人たちが、そういう教育を日本中どこの学校でも受けたということだよ。ここの演技というのはそういう意味でも重要なポイントだし、難しい緊張する場面だよ。

佐藤 この劇って、反戦ではないんですよ。戦争はこういうものですというので、考えてほしいんです。だから、こういう台詞も入れて。

— みんなにここから何か感じて、何かを考えてほしいというメッセージなんだよね。それは仙台大空襲も同じだと感じる。それを見た人が、聞いた人がどんなふうになんて考えてくれるか。みんなの思いが伝わってほしいじゃないと思います。その結果は、すぐには表れないかもしれない。今日見たからといって、すぐに変わるわけ

はないからね。ある日、あの時見たアニメはこういうことだったんだと気がつく人もいれば、みんなの作品を見て、今まで何かっこいいなあと思っていたのがそうじゃないと小さい子が気づくかもしれない。そういう意味では、みなさんほんと大きな仕事をしていると思った。兵隊の関の台詞は、佐藤君たちも入れた方がいいなあと思ったの？ ちょっと、そういう兵隊がいたのかなという気もするんだけど。

佐藤 ちょっと数字は忘れてしまったんですけど、実際に敵艦に命中したのは何千とか何百とか出撃して、当たったのは2回だったかな。本当に、全然当たらないんです。でも乗る側は信じているじゃないですか。自分が出撃すれば敵艦を倒せて、日本の戦況がよくなると信じていくわけじゃないですか。でも、実際は全然当たっていない。そんな成功することは無いという関の台詞は、事実を伝えるには必要だと思われ、実際にそういう人もいたので、劇にも取り入れたんです。

取り組みを終えて、今、思うこと

— 最後にね、1年近く作品制作に取り組んで、やっぱりこれから自分の生き方という大袈裟かもしれ



ないけれど、このことはぜひ忘れてはいけない
ていきたいなというか財産になったなとい
うか、そういうことがあったら一言ずつ話し
てもらえないかな。

長谷川 ざっくり言って、みなさんおっしゃって
いるように戦争はやっぱりダメだなと。自分のや
ることがやっていいことなのか悪いことなのか
自分の頭で考えることが一番大切だなと思いまし
た。

三浦 正直、この取り組みをする前は、戦争は遠
い存在のような感じがありました。学校の授業で
しか習わないような。でも、取り組み中で話を聞
くと、そんな遠いことではないと思いました。

中塚 三浦君ともかぶりますが、今回の仕事に携
わるまでは戦争というのは遠い存在のような感じ
で、この仕事を引き受けて戦争の悲惨さとか知る
ことができたので、けっこう身近に感じるものが
できました。今回の映像は、子どもたちにもちゃ
んと伝えていきたいと思います。今回の映像制作
に携われてよかったと思います。

伊藤 話を聞いていくうちに戦争の悲惨さという
か、たくさん死者を出してまでやるべきこと
だったのかなあとか、他の方法はなかったのかなあと思
いました。やはり、今回お話を聞かせていただいた実体験は、
それぞれ一人ひとりまったく違うんですけど、どれももの
すごく悲惨なものなので改めて戦争の意味を考えるきつ
けになりました。

佐藤 回天って、出る場所がないから出発したら絶対死

高校生 大学生 語り継ぐ戦争



語り部の言葉に字をつける仙台工業高校の演劇部員(仙台市宮城野区)

仙台工業高 模型部
模型を落とすなら飛 撮りアニメーションを作っ
た。空襲をテーマにした30分ほどの映像作品を作った。市
政資料館で上映された。空襲をテーマにした30分ほどの
映像作品を作った。市政資料館で上映された。空襲を
テーマにした30分ほどの映像作品を作った。市政資料館
で上映された。空襲をテーマにした30分ほどの映像作品
を作った。市政資料館で上映された。空襲をテーマに
した30分ほどの映像作品を作った。市政資料館で上映
された。空襲をテーマにした30分ほどの映像作品を作
った。市政資料館で上映された。空襲をテーマにした30
分ほどの映像作品を作った。市政資料館で上映された。
空襲をテーマにした30分ほどの映像作品を作った。市政
資料館で上映された。空襲をテーマにした30分ほどの
映像作品を作った。市政資料館で上映された。空襲を
テーマにした30分ほどの映像作品を作った。市政資料館
で上映された。空襲をテーマにした30分ほどの映像作品
を作った。市政資料館で上映された。空襲をテーマに
した30分ほどの映像作品を作った。市政資料館で上映
された。空襲をテーマにした30分ほどの映像作品を作
った。市政資料館で上映された。空襲をテーマにした30
分ほどの映像作品を作った。市政資料館で上映された。
空襲をテーマにした30分ほどの映像作品を作った。市政
資料館で上映された。空襲をテーマにした30分ほどの
映像作品を作った。市政資料館で上映された。空襲を
テーマにした30分ほどの映像作品を作った。市政資料館
で上映された。空襲をテーマにした30分ほどの映像作品
を作った。市政資料館で上映された。空襲をテーマに
した30分ほどの映像作品を作った。市政資料館で上映
された。空襲をテーマにした30分ほどの映像作品を作
った。市政資料館で上映された。空襲をテーマにした30
分ほどの映像作品を作った。市政資料館で上映された。

途中に出会った高齢の男 性は、家に保管している焼 海軍の煙草がごろごろと 音をたててきた。さうして、 空襲をたどる場面を撮る ことに、「あの時」に近づく ことになった。語り部の80代 前半の男と、東二番丁通り 川内地区を歩いた。「逃 げる途中、赤ちゃんと抱 いたまま逃げた母親が 倒れていて、足がすくん だ。助けがなかった」と男 性、広瀬川沿いには防空壕 の跡らしきものがあつた。

戦中に出会った高齢の男 性は、家に保管している焼 海軍の煙草がごろごろと 音をたててきた。さうして、 空襲をたどる場面を撮る ことに、「あの時」に近づく ことになった。語り部の80代 前半の男と、東二番丁通り 川内地区を歩いた。「逃 げる途中、赤ちゃんと抱 いたまま逃げた母親が 倒れていて、足がすくん だ。助けがなかった」と男 性、広瀬川沿いには防空壕 の跡らしきものがあつた。

戦中に出会った高齢の男 性は、家に保管している焼 海軍の煙草がごろごろと 音をたててきた。さうして、 空襲をたどる場面を撮る ことに、「あの時」に近づく ことになった。語り部の80代 前半の男と、東二番丁通り 川内地区を歩いた。「逃 げる途中、赤ちゃんと抱 いたまま逃げた母親が 倒れていて、足がすくん だ。助けがなかった」と男 性、広瀬川沿いには防空壕 の跡らしきものがあつた。

戦争は体験していない。でも、その悲惨さに近づき、伝 える必要がある。高校生も大学生がこの夏、戦争を語 り継ぐ。

戦後70年

火災が広がると、動 かし撮影した。

戦争とは 芝居で考えるきっかけ

名取北高演劇部 全国大会で挑戦

芝居で戦争を語り継ぐ。高校生も大学生がこの夏、戦争を語り継ぐ。戦争は体験していない。でも、その悲惨さに近づき、伝える必要がある。高校生も大学生がこの夏、戦争を語り継ぐ。

恐怖と残酷さ、今に「代弁」

「代弁」は、戦争の悲惨さを伝えるための一つの手段である。戦後の70年、私たちは戦争の記憶を語り継ぐ必要がある。戦争は体験していない。でも、その悲惨さに近づき、伝える必要がある。



全国大会で人間魚雷「回天」を題材に演じる名取北高演劇部のメンバー(高松市、安保演劇施設提供)



全国大会を前に、練習に打ち込む2月、名取市増田

「代弁」は、戦争の悲惨さを伝えるための一つの手段である。戦後の70年、私たちは戦争の記憶を語り継ぐ必要がある。戦争は体験していない。でも、その悲惨さに近づき、伝える必要がある。

ぬんですよ。窒息死するか爆発して死ぬかどっちかなんです。それを最初1艇出発させたら成功しちゃったんですね。本当は成功してほしくなかったのに。それをつくるのをやめさせるために、最初の1艇を試して出発させたみたいなんです。ところが成果を上げてしまったので、これはやるべきだということになって始まったんですね。試してやったら成功してしまっただけから止められずに始まって、いろんな人が結局無駄な死を遂げなくてはならなくなってしまう。僕たちがやるべきことって伝えることだろうとは思いますが。だから、今回機会をもらったのもすごくありがたかったし、こういう機会が増えていったらいいのになと思います。

薄井 街頭で戦争反対とかを言うことだけでなく、演劇とか映画とかを通じて見て感じる機会が少ないと感じています。演劇とかで見て、若い世代は本当に知らないのです、それをもっと知って欲しかったらいいんじゃないかなと思います。

— 演劇とか映画とかを観て、ああそうだなと自分の感性に響くものがあるって、これはおかしいんでないとか、あるいはこういう討論をできること自体、今はいいよなという人もいますよ。今も甲子園では決勝戦で結果が気になるけど、あの時代は野球すらやっつてはダメという時代だった。それが今は戦争のない状態だからできるというの間違った事実だね。平和だからこそ演劇を観るんでも、音楽を聴くんでも、これはダメとか一切規制されない自由が保障されてなければならぬわけだしよ。そして、そこからそれぞれ見たり聞いたり読んだりしたことを自分でもう一度考え、自分の行動を選択し

ながら進んでいく。人間としてちゃんと保障されることをきちんと保障していくというか。だから反対の意見があっても、それもいう自由はちゃんと保障しながら、討論をしていけばいいわけだよ。このような表現活動なんかは一番規制される分野じゃないかな。権力なんかにとっては。表現の自由なんていうのも非常に大事な、ある意味では一つの武器だよ。創作活動を通して何か感じてほしいとかいう作り手のメッセージ、受け手がどう捉えようとそれはしょうがない。場合によっては、まったく自分たちと逆の捉え方をする人もいるかもしれない。共感して受けとめてくれる人もあるかもしれない。それで一緒に仲間に入れてという人もいれば、いっぱいいろんな形が出てくるけど、そういうことをお互いに尊重しながら、これからもぜひ続けて欲しい。今回の二つの作品を通して、みんなの熱意なり思いが伝わってほしいなと思いました。今日は貴重な夏休みの中、ありがとうございます。

(2015年8月20日)



人間として成長していく姿

安 保 健（名取北高校）

今年度、生徒たちは、「戦争」という重いテーマで構成された劇を、入部しての1年生も参加し、つくっていききました。この劇をやるのが決まった時、「自分たちがやってもいいものなのか」と、とても悩みました。しかし、彼らが様々な資料を基に劇をつくり上げていく中で、学校の授業では習わないことを学び、この劇をやる以上、少しでも納得のできない演技では駄目だと、戦時中の青年たちの複雑な気持ちを理解するため、彼らなりに話し合いを重ねながら、よりリアリティのある演劇を目指し、演技だけでなく、全員が人間としても成長していくことができたと思います。劇に登場する人間魚雷「回天」も長い時間をかけて完成度の高いものを作り、より強い印象を与えるために試行錯誤しました。そして彼らの不安定だった気持ちは「この劇をたくさんの人に観てもらいたい」という気持ちに変わっていききました。その結果、南部地区大会、県中央大会、東北大会にてたくさんの方に観劇していただき、更には2年連続（全国高等学校春季演劇フェスティバル）、夏の全国を含めると三連続の全国大会に出場させていただくことになりました。彼らにしかできないことを、東北の代表として全国の舞台で演じきったと思います。

2月には名取市文化会館での特別公演を企画していただき、演劇関係者だけでなく、地元の高校生や地域の方々にも観ていただく機会を与えていただきました。一回一回を大切に、支えてくださっているたくさんの方々への感謝の気持ちを忘れずに上演しました。

今夏上演した「祖父の記憶は「父を騙す」が下地になっています。「父を騙す」を観た県内の卒業生と「父を騙す」で先輩たちを指導してきた本校卒業生が中心となり一から作りました。大学生が中心

で夏休みもなく切磋琢磨しながら創り活気のある稽古でした。自分たちが上演する芝居の意義を少しでも社会に問いかけるものになればとの一心で演じていました。上演前に緊張していた彼らの表情は上演後、自信に満ちていました。

不安を乗り越えた部員たち

下 村 由 夏（仙台工業高校）

仙台工業高校模型部は、模型製作、模型を使ったコマ撮りアニメーションの制作、小学校や児童館などでのボランティアを軸に23名で活動しています。しかし、4年前は部員減少で廃部寸前でした。一か八かでコマ撮りアニメーションを始めた私達に、最初に上映会をご依頼をくださったのは菅井所長が館長を務められていた宮城野児童館でした。菅井所長は子供達の心をつかむ技のデパートのような先生で、その薫陶を受けて私達の活動の場も広がっていききました。

戦後70年の今年、仙台市戦災復興記念館から仙台空襲に関する作品制作のご依頼がありました。お声がけいただいたいうれしかった反面、今どきの高校生が、仙台空襲という重いテーマや壮絶な体験をされた方々と向き合うことに耐えられるのかと不安もありました。しかし、体験談を中心にコマ撮りも使って記録を残すという方針を決めると、部員達は体験手記を何度も読み、休日を返上して「仙台の戦災・復興と平和を語り継ぐ会」の方々や現場を回り、その重い言葉に耳を傾け記録しました。仙台市戦災復興記念館の皆様からもサポートをいただき、7月の「戦災復興展」で無事に作品を上映することができました。戦災復興展には戦後70年という節目もあり例年はないほどお客様がいらしたそうで私達もたいへんうれしく思っております。今まで手を差し伸べてくださった多くの方々への感謝の気持ちを忘れずに、これからもボランティア活動やコマ撮りアニメの制作に取り組んでまいります。

報告・みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい

特設分科会「東日本大震災の復興を目指して」

参加者感想

この夏（8月16日～18日）、『みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい』教育研究全国集会2015』が仙台市内を会場に開催され、全国から教師、父母、研究者など延べ5000人が参加しました。みやぎ教育文化研究センターは特設分科会『東日本大震災からの復興をめざして〜被災地の今と、教育・地域・運動の課題』と、最終日の石巻フィールドワークの運営を担当し、集会に参加してきました。

以下は、特設分科会に参加した全国各地の参加者の感想です。

■ 金平茂紀さんの講演にもありましたが、『災後』教育の重要性を再確認しました。印象的だったのが「『学校が命を育み、守るところ』ではなかった」という制野先生の言葉でした。

宮城県教委の震災後の対応の杜撰さは、他県でも同様だと思います。実際に子どもたちに向き合っている教員だからこそ、震災のもつ意味の大きさが本当に分かるのだらうとも思います。『災後』教育、あ

るいは『命を育む』教育について、これからも継続して設定していただきたい。

〈長崎県・教員〉

■ 多くの実践を伺い、被災地の今を知ることができて大変勉強になりました。

私は静岡県の特別支援学校に勤務しています。原発も30km圏内にあります。東海地震、南海トラフ地震が起こるといわれて久しいですが、現在の学校で行われている防災教育が本当にこれでもいいのかと考える良いきっかけとなりました。

〈静岡県・教員〉

■ 私の学校も海拔1m、元塩田跡に立つ学校であり、津波避難訓練も行っているが、今回の討論の中で、下校時、また家庭に戻ってからの児童生徒の被災（死亡者）数聞き、大きな課題だと思いました。

津波の被害が想定される地域の学校として、防災教育の重要性を改めて感じました。また同時に、自分の住んでいる地域を見直していきたい。（和歌山県・教員）
■ どのレポートからも、被災した人々の心支え合ってきた人々の心が伝わってきました。

した。災害があったときの組合の役割もいろいろ学ぶことができました。自分の地域で何かあったときに共通することだと思い、生かしていきたいと思います。

『命』、生まれる・死ぬの命も含めて、どう生きるかを考えさせられ、私自身にも突きつけられた分科会でした。

〈福岡県・元教員〉

■ 宮城県の『創造的復興』計画の問題点、福島県の『原発被害』など、被災は今も続いていることを改めて理解した。特に『命と向き合う教室』の制野実践は、子どもたち自身の再生の力、連帯の力、人への信頼の力のすばらしさと、それを援助するための『綴り方教育の力』を感じた。

〈京都府・教員〉

■ 討論の中で、被災地との交流で受け入れ側はどうかということが出されました。原発被害の福島の受け入れは、小中高生の受け入れは、放射線にさらしたくないことから、積極的にはできない。しかし若い世代には現実を知ってもらいたいとも思っている。

受け入れ側は単発で終わってもいいと思います。長年の交流となるとお互い負担が大きくなるからです。大切なのは、若い世代が見たこと・聞いたことを「こんな風に伝えました」「こんな風に思いました」という「お知らせ」ではないでしょうか。なかなか被災地として発信するのが難しい中、他県から発信してもらうことは本当にありがたいことです。

〈福島県・研究者〉



詩の授業から

伊野文子

「学校は、子どもたちにとって、どのような場になっているのだろうか？」

「教師の役割とはなんだろうか？」

「学びとは、どういう営みだろうか？」

「日本の社会や政治の在り方は、子どもを育てる土壌になっているのだろうか？」

答えの出ないモヤモヤとした思いが、私の心を取り巻いた夏。そのような中で、改めて、「学校」とは、どういうものなのだろうか、と考えました。

私は、大きく捉えると、「学校」とは、子どもと教師と保護者とが文化を共有し、つながり合い、育ちあう場だと考えます。そして、「不完全な人間の集まり」であるということ前提として、お互いの良さを認め合い、未熟な所は、それを責めるのではなく、助け合い、支え合うこと。違いを認めて、つながりあっていく場が「学校」なのではないでしょうか。しかし、言うは易く行うは難し。日々、挑戦です。

私が、勤めているのは、東京の三鷹市にある私立明星学園小学校。自主カリキュラムを編成し、検定教科書を使わずに、授業をしています。本校に勤めて9年目にして、初めて6年生を担当しています。

6月、「川とノリオ」（あまんきみこ）に取り組む前に、詩「慟哭」と「子どもたちよ」（いずれも大平数子）を読みました。

まず、最初に「慟哭」と黒板に書き、「慟哭」とは「身を震わせて大声で泣く」という意味であることを伝えました。その後、一連ずつ、黒板に書いて子どもたちに投げ掛けました。

一連目 しょうじ よう
やすし よう

子どもたちは、「人の名前を呼んでいる」とか「最初の『よう』は泣いている感じ。次の『よう』は、呼んでいる感じかな」とつぶやきました。

二連目 しょうじ よう
やすし よう

子どもたちは、「二連目と同じだけれど……。呼んでもこないのかな？ 返事がないのかな？ だから、また呼んでいるのかな？」、「生きているのか、死んでいるのか確かめているのかな？」、「戦後のこと？ 兵士が殺した人の名前を呼んだの？」、「戦争中に死んだ人の名前を呼んでいるのでは？」。

三連目 しょうじ よおう
やすし よおう

子どもたちは、「お」が付け足されたことで、「遠くへ呼びかけている感じがする」とか「見づからなくて、必死で呼んでいるのでは？」とつぶやきました。

四連目 しょうじい よおう
やすしい よおう

子どもたちは、「い」が付け足されたことで、「激しく泣いている感じがする」とか「返事がないので、叫びに近い感じと呼んでる？」とつぶやきました。

五連目 しょうじい
しょうじい しょうじい

子どもたちは、「何でやすしの名前がないのだろうか？」と疑問をもちました。「やすしは見つかつて、しょうじが見つから

なかったのかな?」「見つからなかったから、しょうじの名前を叫びに近い感じで呼んでるんじゃない?」「最後は、いい感じになってるし。」

五連目まで読み、「この詩は、どういう時に書かれたの?」という声が上がりました。そこで、子どもたちに大平数子さんについて、次のような話をしました。

大平さんは、おなかに赤ちゃんがいたときに被爆しました。大平さんの旦那さんは、爆心地の近くで被爆したため、すぐに亡くなってしまいました。おなかにいた赤ちゃんは、生まれましたが、一年一ヶ月で亡くなってしまいました。亡くなった子どもの名前が「しょうじ」でした。大平さんには、もう一人お子さんがいました。長男の「やすし」。二歳でした。やすしは、生き延びました。しかし、大平さんが、結核にかかってしまったため、高校生になるまで、離れ離れで生活していました。

子どもたちは、「そうか。……。」「やっぱり、しょうじは死んでしまったのか。」「原爆か……。」「……。」まなざしは、真剣でした。

そして、広島に原子爆弾が落ちたのは「1945年8月6日」であることや「原子爆弾の威力」について話しました。また、原子爆弾は「リトルボーイ」と名付けられ、その原子爆弾を積んだ飛行機は「エノラ・ゲイ」(機長の母の名)と呼ばれたことな

ども話しました。

次に、大平さんの作品「子どもたちよ」を読みました。

子どもたちよ

大平 数子

子どもたちよ

あなたは知っているでしょう

正義ということ

正義とは

つるぎをぬくことではないことを

正義とは

“あい”だということ

あなたたち

みんな母さんの子だから

正義とは

母さんを悲しませないことだということ

子どもたちよ

あなたは知っているでしょう

ここでは、キーワードとなる「正義」を

隠して、どんな熟語が入るかを考えさせ

ました。子どもたちは、迷わず「平和!」

「平和?」「平和しかないでしょう!」の声。

私が「平和ではないんだよね」というと「え

〜!」「じゃあ何!」私
が、紙を剥し始めると
……。「justice」

「正義?」の声。最後に、

「あなたの考える正義

とは」をまとめさせま

した。子どもたちのま

とめを紹介します。

○ 自分の良心に従っ

て正しいことをする

ということ。日本国

憲法にも正義と書いて

あるから。自分の

しなければいけない

こと。(R・S)

○ 私は、なんとなく正義とは戦争などに

ゆいいつ勝てる方法。つまり、だれもが

持つ憎しみや悲しみに負けない感情が正

義だと思いました。(A・M)

○ 人間もっている良心。人間の中の正

しい心。悪い物と戦う心。やさしさ。人

を思う心。友達が悪いことをしていたら、

ダメだという力。人を守ること。(A・M)

○ 自分のいしを持って、人のため、私の

ために正しいことをすること。困ってい

る人を助けて、その人にとって、うれし

いと思うことをする。安心することをす

る。(S・M)

○ 人としてやるべきことを決めて、そ

のことをつらぬくこと。たとえそれをこ

ばむものが、どれだけ強くて関係ない。



とにかく闘うこと。 (Y・Z)

○ 正義ということは、人を守る。強いということを子どもたちに教えている。みんなに平和をもたらすことが正義だ。

(Y・H)

○ 正義は、みんなヒーローだと思ってるけど、私はそうは思わない。なぜかというとき、もし、ヒーローが悪をたおす時、みんなはすごいと思うかもしれない。けど悪にとつては、自分の正義をつらぬいただけで、ヒーローにたおされたら「自分に従っただけなのに」と思うはずだ。

正義は、人それぞれちがうから、人によって正義のきじゅんがちがう。だから、いじめなどが起きる。いじめてる人にたいしては、みんながうざいと思ってる。やつをたおしたから、自分がヒーローになったと思ってる。けどいじめられてる人的には、みんながおもしろがって、いじめてると思う。だから正義はないんじゃないかな。

(K・H)

○ 人によって正しいと思うことは、ちがうけれど自分の正しいと思うことをなにがなんでもつらぬき通す力を正義と言うと思う。

(R・I)

○ 正義とは自分にとつての正義と、相手にとつての正義がある。そして違う人のことを考える正義もある。なので、人々が言い争った時は正義VS正義になる。だから正義とは、人それぞれにあるもの。

(Y・K)

『ニルスのふしぎな旅』の楽しさを子どもたちに！

『ニルスが出会った物語』①～⑥

- ①まぼろしの町 ②風の魔女カイサ ③クマと製鉄所
④ストックホルム ⑤フシのゴルゴ ⑥巨人と勇士トール
セルマ・ラーゲルレーヴ 原作／菱木晃子 訳
構成 平澤朋子 絵／福音館書店／2012～2013

これは初めてのニルスの絵本（絵童話）シリーズです。

『ニルスのふしぎな旅』（菱木晃子訳 福音館書店2007）は全体が55章から成る長編の物語ですが、その中から6つの章を厳選し、絵本化しました。絵本版とはいえ、抄訳ではないので、1冊がどれも4、50ページあります。平澤朋子さんの美しい挿絵も魅力です。物語を豊かに語るたくさんの挿絵はため息が出るほど美しいです。製鉄所のために住む場所を追われるクマと、そのクマに命を奪われそうになりながら製鉄所を作った人間の素晴らしさに感動し、クマの要求を拒否するニルスの物語や、美しいストックホルムの都がどうしてできたのか、老紳士の語る海の乙女（アザラシ）と若い漁師の哀しい愛の物語など、この6つの物語はどれも豊かで深く、感動的です。高学年の子どもたちにも薦めたい本です。

『ニルスのふしぎな旅』（セルマ・ラーゲルレーヴ）は、ご存じのように、妖精のトムテに悪さをして小人にされたニルスがガチョウのモルテンの背中に乗って、がんと一緒に国中を旅する物語です。今から100年以上も前にスウェーデンで出版された物語です。完成まで6年の歳月がかかっています。旅をしながら、ニルスは自分の国の地理や歴史、自然や産業、人々の暮らしなど、たくさんのことを学び、大きく成長します。その冒険の物語は壮大で、読みごたえがあります。上下2冊、1000ページを超える長編ですので、子どもたちはなかなか手に取ってくれませんが、子ども時代にぜひ出合ってほしい物語ですので、このシリーズがそのきっかけになればと期待しています。 (まつお文庫 松尾福子)



子どもたちのまとめを読んでいると、今の世界の縮図に生きていくなあ」と感じます。「正義とはよくです。」と大人の価値観を押し付けたり、誰かの考えで一つにまとめたりするのはなく、子どもたちの思いを交流させていくことが大事なのではないかと思えます。また、大上段に構えて「正義」を考えるのではなく、友達関係の中でリアリティをもって考えさせることも大事だと思えます。

教師側の「この教材を子どもに！」という思いと、子ども側の「学びたい！」という思いが一致するように、何故、今、この教材なのかを問い続けていかねばならないと思えます。そして、自由な学びが保障されるように、私たち教師は、今こそ「怒りを智慧に」変えていく「賢さ」が問われています。

(東京・私立明星学園小学校)

おすすめ
BOOK

●教育時評

「政治的中立」と

学習の自由

―「九条俳句」事件

高橋 満

梅雨空に「九条守れ」の
女性デモ

この句を読んで、どのように感じるでしょうか。俳句は、研ぎ澄まされた短い行間に、読み手が意味を作り上げることにより成り立つ芸術です。芸術一般がそうであるように、自由な表現空間があり、作者と読者とがあつてはじめて成り立つ「芸術世界」です。

作者は、この句を詠んだ背景をつぎのように述べています。

昨年6月初旬、銀座で集团的自衛権行使容認に反対する女性たちだけのデモに出会いました。雨のなか、若い人から老人まで、子どもをおんぶしたり、ベビーカーを押している若い母たちもいて、みんな『平和を守れ』『九条守れ』と声をあげながら行進してい

る姿に自分の思いが重なりとても感動しました。そのとき詠んだものが先の俳句です。

この句をどのように感じるのかは個人の感性によりますが、そのときの情景や作者の心情がありありと浮かんできます。「梅雨空」という季語は、平和をめぐる危機状況を暗示して見事です。

この俳句は、さいたま市の公民館で活動する俳句サークルの女性がつくり、「公民館だより」に掲載句として選ばれました。しかし、掲載は拒否されました。その理由は、「公民館は常に中立の立場でなければならぬ。世論が大きく分かれている場合に、片方の意見だけを載せることはできません。『九条守れ』のフレーズが公民館の考え方であると誤解を招く可能性があるためです」というものでした。つまり、「憲法」を守ると表明することが「政治性」をもつと考へ、掲載すれば「上から」の批判を受けるだろうと斟酌した対応です。作者の女性は、くり返し掲載を求めましたが認められないため、提訴しています。

近年、「政治的中立性」を盾にして、これに類似する集会等での公共施設の利用拒否、後援拒否の問題が頻発しています。

この「問題」は、掲載拒否をめぐる違法性、憲法21条の「表現の自由」、憲法26条の「学問の自由」、教育基本法16条・社会教育法12条の「不当な統制的支配」などをめぐり争われ「事件」となりました。

そもそも、戦後すぐ文部省は公民館で「自由に討論談義する」ことを奨励するようにとの通達をだしました。だからこそ、社会教育法には、公民館の事業として「討論会」があります。討論会は異なる意見があるからこそ、はじめて成り立つ学習機会です。

もちろん、公民館を使って特定政党の政治活動をすることは許されません。しかし、政治的な議論をすることは奨励されなければならぬのです。学習の場である公民館では、多様な意見が自由に表現される「公共空間」としての役割が期待されています。つまり、「安保法制について」、「原発について」、「自治体の統廃合について」、住民参加と学習の自由のもとに自由闊達な意見が表明される場を提供する、それが大切な役割です。掲載拒否は、「不当な統制的支配」であり、学習の自由を否定し公民館の役割を自ら放棄するものでしかありません。

より問題なのは、公務員は憲

法を守ることを宣誓しているはずなのに、政府・自民党の圧力を斟酌し、「九条守れ」がいけないという「自粛」が強いられている状況が広がっていることにあります。大田堯さんが、「情報統制」が進んでいる。私たちは魂を奪われ、命に関わる問題にさらされていることを忘れてはならないだろう」と新聞に述べられています。表現や集会の自由、学習の自由がない社会に民主主義は育つことはないでしょう。

女性は、提訴に踏み切るとき

の思いを次のように述べています。

知識もなく、年齢のこともやいろいろ不安で、決めかねていましたが、民主主義や表現の自由が踏みじられようとしている昨今の状況を見てみると、やはり、理不尽なことに黙っていいいいのか。自分の立場でしかできないことがあるならやるべきではないのかとの思いが強くなり、遂巡はありましたが、志は曲げたくないし、後悔もしたくないと思ひ提訴を決めました。

この志を、しっかりと支えなければならぬ。

(東北大学)

PART VII

みやぎが不登校率全国一なのはどうして？ 『みんなの学校』になるために

日常的な子どもたちの営みから、子ども
の今を切り取りたい・受けとめたいと開
催してきたフォーラムは、今回で7回目
となる。

今回は当事者性が強い「不登校」がテー
マ。近年、不登校は個別的な問題として
捉えられがちであることが気になってい
た。今年、宮城県教委は『不登校率全国一』
のデータが出ると、途端に『不登校対策』
なるものを学校現場に下ろしてきた。し
かし、この『対策』は、苦しんでいる子
どもたち、悩んでいる家族には遠いアプ
ローチだ。フォーラムは、「学校に行けない」
子どもたちが何に苦しみ、その行為から
何を発信しようとしているのかを受けと
め、どのようなサポートができるのか、ご
家族と教師の体験から学び、話し合いた
いと企画した。また今回はじめて教育相
談センターとの共催で実施した。

1. 話題提供

① 菅原操さん（母親）

子どもが中学1年生の時、突然の不登校
で自分たち親も混乱、かわいそうという
気持ちと、とにかく「行ってくれば」と
いう気持ちの交錯。学校の前にくると本
当に足がすくむのを見て、それほどこ
となのかと気づく。そのうち食欲がなくな
るなど子どもにも精神的なストレスが
見えてきて自分は受けとめることにした。

しかし、その思いに父親とのズレはあり、
夫婦関係も、親子関係も難しかった。

子どもは集団生活が難しいようだった。
同じ小学校からその中学校に入学したの
は2人だけ。他の子どもたちは同じ小学
校からきていたのもなじめない原因だっ
たかもしれない。

自分は養護の先生と連携していたので、
孤立することは避けられた。「親の会」を
紹介してもらい、経験したお母さんたち
もたくさんいて、月に一回、いろんなこ
とを吐き出して楽になれた。息子が3年
生の時、自分たちの学校にも「親の会」を
立ち上げ、現在も2ヶ月に一回開催、参
加し続けている。

息子は2年生の2学期から保健室登校。
3年生の2学期にはたまに教室にも入っ
た。部活でできた友人がいてラッキーだ
った。試行錯誤しながら私立高校に入学。
やはり集団生活が困難で1年生で中退。単
位制高校に再入学するも、1年生で大検
の半分をとって、残り2年高校生活を続
けるよりはと、大検で大学入試すること
にした（中学生時は家庭教師で勉強してい
た）。大学は文系だったが、職業訓練校に
も通い、電気関係の技術を身につけて27
歳の時に就職した。

学校に行けなくなつたのは本能的に自分
を守るためだったと思う。いじめられて
いたが、ほんとうの原因は今もわからな
いという。先生方や周囲とのかかわりは

ラッキーだったと思う。親の会には助けられた。

② 日下幸子さん（養護教諭）

今の子どもたちはとにかく忙しい。中学生になると受験モードになるが年々それが強化されている。部活に入らないとダメ、休んではダメ、そうしないと望む高校に行けないと思っっている。そして塾は中1で夜の9時から10時に終了。3年生になると12時くらいまで自習室で勉強するという。小学生にまでエスカレーターしてきている。これを何とか止められないものか。このような社会を大人が作ってしまったことを、子どもたちに申し訳なく思う。子どもたちは周りを見て、縛りあっている。教室では「馬鹿にされる、いじめられる」と失敗を恐れている。大人の前ではからかいとかはしないが、子どもたちの内部にある空気、力関係とかを感じる。リーダーのようにしているが実は孤立していたりと、苦しい世界にいる。「比較や競争の教育」の体制が背後にある。

6年前に今の学校に赴任した時は保健室に来る子はあまりいなかった。「保健室に行ったら負け」とか考えていたのかもしれない。今は毎日20人〜30人ぐらいの生徒が訪れる。長い時間保健室に居る子、保健室登校の子が多くなっている。

保健室に来る子は、「くでなければ」の思いが強く、自己肯定できない。また「お

母さんから認められたい」「誰かを見返してやりたい」など、できない自分を認めることが難しいようだ。保健室で認められた体験をさせたい、あったかい体験をさせて卒業させたいとも思う。「認め、見守り、待つてあげられる」大人たちの中で、子どもたちに育つて欲しい。

③ 遠藤利美さん（中学校教諭）

2学年146名中、全く学校に来ない生徒4人、不登校気味の生徒6人。明日は行くと言うが、朝、玄関で靴をはくと固まる。そういう子どもたちと何人も付き合ってきた。学校に来られない子どもたちの自責の思いは強い。

話を聞くと人間関係などから行きたくない思いになるといふ。親は、家においてよんぼりしている子を見ているのがたまらない。力づくで連れてきたり、登校刺激しても解決しないと実感した。「子どもを信じて待つ」に尽きる。

家族の問題も大きい。祖父母から攻められて情緒不安定になった母親もいる。それは子どもにも辛い。両親も自分の楽しみを見つけてほしい。

教師はなんとか来させたいと思いがち。部活だけでも通ってきていた子に、顧問が部活にくるなら「1時間でも教室に行け」と話した。顧問は部活で生き生きしているの背中を押したつもりでも、子どもには辛く、親から「どうしてくれる」

とお叱りの連絡があった時もある。

6月末に「親の会」

を呼びかけ、5人中4人が参加した。お母さんたちはほっとした様子だった。支え合う環境がつけられたらと思う。

（受験について）私立高校をふくめて現実として受け入れの道は随分広がっている。通信制高校も増えている。特定の学校に拘らなければ道はいくらでもある―寺沢相談室長。

④ 遠藤嘉和さん（高校教諭）

私たちの高校はオール1でも中学校をずいぶん休んでも入れる。他の高校を中退して来る子も別人のように明るく過している。授業は10人以内と少人数。部活の強制もしない。おしゃれも好きにしてよい。7年在学している子もいて、復活するのを待つて4年目から通学している子もいる。不登校生徒に特化した高校といえるが、はじめに来る子にとっては良い学校と思う。ここ数年一定数の入学があるが、殆どの子が中学校を不登校なので、重症な子にはスクールカウンセラ



ーやソーシャルワーカーもとても頼りになつてゐる。家庭の問題も原因として多いので県教委にはぜひ増やして欲しい。

何かと支援は必要だが、出口はきびしい。2、3年生は就職活動に向けて指導を強化している。身なりや礼儀作法など、エントリー制にして、やる気のある子に申し込ませて指導する。

中学校には殆ど行けていなかつた子が今では中心的存在だつたりする。高校に入つて自分を変えようと思つてゐる子にいろいろ用意や支援をする。子どもたちは純粋な気持ちで学んでいる。少人数で教職員も40人と多いからできるところもある。進路室には卒業生がよく集まる。

2. 話し合いから

・ 「今日の話は学校に行かないことも認めて待つ・支援する」だが、県教委のスタンスは結局「学校復帰」なのではないか。

・ 不登校の背景には国の教育政策がある。学力を競わせ、多様な子どもたちとともに育つ場になつていない。

・ 手をかけ、声をかけられている子どもたちは幸せ。たいていの先生方は忙しくてそういう時間はないようだ。

・ 子どもたちは競争させられることに押しつぶされている。

・ 休みがちな子には毎日連絡を取るが、

部活を終えて19時くらいしかそういう時間が取れない。

・ 不登校・高校中退となり、やめた子どもたちは何のフォローもされなくなるのが現状で、孤立感と不安が大きい。

・ 親の一番の悩みは「小さい時の子育てが間違つていたのか」という思い。

・ 先が見えないで待つといつても不安。この不安からいつか抜け出せるのか。

・ はじめは暗闇にいるようだが自分が動き出せば見えてくる世界も変わるし、親の変化は子どもの変化につながる。トネルはいつか抜けられると楽観的に考えよう。

・ 家にいるからできることに挑戦。家事など生活者としての力がついた。

3. まとめ

不登校は自分を守るためのギリギリの選択であり、本人や家族にとつては辛い体験であることはフォーラムでも口々に語られた。そのことを、子どもの居場所としての学校、人として育つための教育の場の在り方を問い続けている私たちは、いつも深く認識していきたい。同時に不登校はやむを得ない通過点であつても、その先に進む道の展望が見えるような社会的な仕組みと、それを支える人々の往来がなければ、子どもたちの人生は閉ざされかねないことも指摘の通りである。

親の心配も結局のところ出口にあると思う。どんな時にもやり直しのきく道がきつとあると心の底から励ますことができよう、寛容な社会をつくっていきたい。「弱い立場の人々にとって生きやすい社会は誰にとつても幸せな社会」は北欧の福祉を支える思想だ。大人が謙虚に不登校を考え合うことは、全ての子どもたちの健やかな明日、みんなの学校につながるに違いない。

(事務局 須藤道子)



多くのお世話になった『先生』の中から、ここでは二人の『先生』について書きたいと思う。

私は、もともとこの職に就こうと思っていなかった。父（元高校教諭）と喧嘩する度に、「絶対に先生になんかならない！ 敷かれたレールになんか乗るもんか！」と思っていたからである。（結局は父と同じ職に就き、父と同じように我が子を叱ってしまう自分に、たまにガツカリしたり諦めたりしている）そんな自分にとって、人生の岐路はやはり大学進学だったと思う。

高校時代は部活動のことしか頭になかったので、いざ受験となったときに、自分の進路がまったく考えられなかった。京都や奈良の寺巡りが好きだったから、「京都か奈良の大学に行きたいなあ」と漠然と思っていた高校3年生の秋（冬?!）に、宮城教育大学への進学を勧められて、「あなたに向いていると思いますよ」と言ってくれた担任の先生。私は、その言葉で宮教大を受験することに決めた。その先生は数学の先生で、い

つも穏やかに、にこやかに授業を進める先生だった。しかし一度だけ、私たちクラスの生徒を強く叱ったことがある。それは、掃除を真面目にやらず、みんなでふざけていたときだった。そのときの先生の姿を、今でも覚えている。先生自身も生徒と一緒に机を運びながら、真面目にやらない私たちを叱ったのである。そんな先生

わたしの出会った先生 10

鬼の家の電話番号

だったから、「あなたに向いていると思いますよ」と言ってくれた時に、その言葉を「ああ、そうか……」と、すんなり受け止め、進路を決めたのだと思う。その進路があったからこそ、今の職に就いている自分がいると思うと、先生との出会いに改めて感謝したい。そして、もう一人の『先生』は、やはりこの方しかない、富樫昌

良先生である。

私が富樫先生に初めて出会ったのは小学生のときである。まさか30年もお世話になるとは、もちろんそのときには思いもしなかった。その頃、教務だった富樫先生は、3年生だった私のクラスに何度か来てくれた。忘れられない授業がある。それは、昔ばなし「桃太郎」の話をしてくれたときのこ

早坂 百合恵

とだった。「鬼ヶ島に住んでいる鬼の家には、電話がある」というようなことを言い、黒板に電話番号を書いた。私は、その電話番号をメモして帰った。帰宅して、母に話したら、「電話をかけてみよう！」ということになり、何も考えずにその番号をダイヤルしたのである。何も考えていなかったから、誰が出るかも想像せず、電話

がつかがり「もしもし」と言われたときに、とっさに「どなたですか？」と訊いてしまった。その電話口に出たのは、なんと富樫三千子先生（昌良先生の奥さん）だった。つまり、富樫先生は、「鬼の家の電話番号」と言って、自分の家の電話番号を黒板に書いたのである。なんとというユーモア……！

この出来事は、ずっと忘れられない思い出である。（実際に電話をかけたのは、どうやら私だけだったらしいが……）
そして今、富樫先生とは「大沢9条の会」の学習会で一緒にいる。教職を終えられても、いままなお教わることが数多くある。そして、その姿から学ぶところもたくさんある。楽しい学校、そして平和な社会を作っていくために、自分にできることを頑張る、そしてこれからもたくさん教わっていききたい。『先生』は、いつまでも『先生』なのである。

（上杉山通小学校）



して思うこと

みやぎ教育相談センター相談員

松谷三喜子

相談員になって8年目。電話相談では、顔の見えない相談者の声や話し方で、何を訴えているのか、何に困っているのか、どんなことを求めているのかを、丁寧に聴きとることをこころがけています。内容は大きくは不登校・ひきこもり、家庭生活、学校生活など多岐にわたり、身近に相談できる人がなく、切羽詰まって電話をかけてこられる方がほとんどです。これまで出会った相談事例から、困難を抱えている子どもたちや保護者の方の状況、現場の教師たちに求められていることなど、考えてきたことを報告します。

1 学校や担任、大人への不信感からプチ家出

Aさん（中3女子）

…友人に連れられて、本人と面談

中学入学時より、自分の行動や言動が、他の人より正直だったから、先生たちからはよく思われていなかった。授業もつまらないと机に伏せていたりした。それでも、親からは学校を休むことについては、わがまま扱いされて許されなかった。なので、我慢して登校してきた。3年生になつてからは、特に自分の居場所がない学校になってしまった。担任が自分に対して差別的で、私のすべての行動が否定されるように感じた。保健室に行ってもすぐに職員室に連絡され、無理やり3

人がかりで教室に連れ戻された。勉強する気も起こらないし、つまらない。嫌になつて1週間欠席した。親とは話していない。学校に行かないことを怠けている、好きなことだけやって嫌なことから逃げているなど、私を理解しようとしめない。進路のことでも希望を受け入れてくれず、普通の高校で普通の高校生活をしてほしいと願っている。でも私には無理だ。母には学習能力がないように思える。以前同じようなことがあり、その時も私のSOSに気づかず、結果が出てから大騒ぎをしている。こうなる前に何とかしてほしかった。と泣きながら自分の思いを語ってくれました。

■ 自分の思いを聴いてくれる信頼できる大人がいない、母親にさえも理解されないつらい思いを抱えて、プチ家出

をして友人宅に泊まったAさんでした。この1週間を友人親子が彼女のサポートをし、親との緩衝役を引き受けてくれたようでした。次の相談日に母親からお礼の電話がありました。しかし、娘がどういふ状態なのか、本人が話してくれないのでわからないので教えてほしいということでした。学校での様子、進路への希望、家庭での立場など、Aさんが抱えていた悩みや課題について率直に伝えました。担任や、母が思っているほど軽率な考えではなく、大人をしつかり観察していること。これま

で居心地の悪い学校で、休まず登校してきたこと。こんな状況の中でAさんの気持ちがかこまで保つてこられたのは、前向きに生きようとするとする生来の精神的な強さに支えられていたが、限界に来ていて心が壊れてしまうような気がする。今こそしつかり受け止めてほしい。話を聴いてほしいと伝えました。そのあとの母の行動は早く、学校に直談判し、本人の意思を尊重し、希望の高校への進学も認めることになりました。その後、希望の高校へ進学し、高校生活を満喫し、無事卒業。現在は実家を離れ専門学校で、将来の夢に向かってがんばっているとのことでした。

2 いじめによるトラウマから、同級生が怖い、学校に行けない

Bさん（高1男子）

…父親からの電話、後日親子で面談

息子が、入学して5日程通学したが、「人が怖い、動悸がする、フラッシュバックして、足がすくむ」などと訴えて、学校に行けなくなつてしまった。せっかく入学した高校を、欠席が続くのであれば、このまま継続するのは難しいと担任から言われた。これからのことも含めて相談したいという内容でした。面談を希望していたので、本人が来れる状態ならば、一緒に来てもらいたい旨伝え、後日、改

相談活動を通

相談センター報告(第2回)

めて面談することになりました。

相談の内容は次のようなことです。

Bは、まじめで気持ちの優しい子で、小さい時から他人を気づかい、親を困らせるようなこともなく育った。妹がいるが、妹のわがままにも、自己主張せず、自分から折れていた。身体を動かすことが好きで、地域の野球チームに入り活動していた。小6から中1にかけて、少年野球の複数の仲間から、継続的に悪口、暴力などのいじめを受けていたが、何とかこらえてがんばってきた。そのうち、お金を要求されるようになり、このままではやばいと危険を感じ担任に話した。しかしその恐怖心や、友だちへの不信感で、学校に行けなくなってしまった。中2の秋から、卒業まで、地元のケヤキ教室に通い、そこが居場所となり、同じような境遇の仲間と、理解のある先生たちとの中で、少しずつ癒されていった。この間、家庭的には、母との別居、仕事人間だった父親も、職場のパワハラで体調を崩して入院するなど、精神的につらい思いをしている。父親は、仕事に復帰してから息子のつらさに寄り添い、良き相談相手になるために、仕事と家事で多忙な中、交換日記で息子の本音を引き出そうと努力している。高校進学のため家庭教師をつけて成績を補って来てた。入学後も週1回継続している。Bは、将来の希望として、大学進学や、英語が好きなので留

学もしてみたい。そのために、入学した高校への復帰は本人の意思を尊重し、退学することも視野に入れ、前向きに検討したい。退学後の進路についても相談したい。と方向性が見えてきました。そこで、Bさんが、家に引きこもらず、外出することにより、他者との関わりも増え、自信を取り戻すことにもなるのではないかと考え、センターの学習支援を受けてはどうかと提案しました。後日、所長と面談し、英語と数学の学習をすることになり、現在進行形で休まず通っています。

■ Bさんは感受性の豊かな少年で、幼少期ころより、自分の立ち位置を感じ取り、妹に手がかかる分、自分は我慢して、他者を気づかないながら、心優しく成長したようでした。本人との面談で、両親の不和にも心を痛めていたようでした。父親のほうも、個別に話し合いをしたときに、プライベートなことにも触れて話され、父親自身も、これまで独りで抱えていた辛さや心配事を誰かに話すことで、心の重荷を軽くしたかったのかもしれない。

中学生は思春期の真っただ中で、自分を確立するために心が揺れ動いています。この時期は、親以外の大人や友人の影響を受けて自立の道を探っていきます。ところが、学習不振や部活での自信喪失、友人関係の希薄さ、いじめ、教師への不信感など、きっかけとなる出

来事は様々ですが、共通して言えることは、その時までは頑張ってきたけど、もう頑張れない、ゆっくり休みたいという心の悲鳴が不登校としてあらわれます。親は突然の変化に戸惑い、子どもを責め、叱咤激励して何とか登校させようしますが、子どもと親の関係も悪くなっていき、やり場のない思いで電話をかけてくるのがほとんどです。中には、担任や学年主任、養護教諭の紹介による相談もありますが、多くは切羽詰まった相談です。丁寧に話を聴いていく中で、どこかでサインをだしていたことに気づいていきます。

3 やいひに

不登校や引きこもりの相談を受ける時、「もつと、早くここに来ればよかった」ということをよく聞きます。実は相談センターにたどり着く前に、別の機関に相談したが、どうもしっくりこない、聞くだけは聞いてくれるがその先が見えない。相談料が高いなどの不満がありました。相談センターは、相談者の話に耳を傾け、相談者の立場に立って、一緒に考えて、方向性を見つけ、自立を支援するという点が理解され、信頼されているのだと思います。これからもその信頼に応えるように、精進していきたいと思えます。



おすすめ映画

初恋の来た道 (2000年 89分 シネスコサイズ)

◎ チャン・イーモウ監督のベルリン国際映画祭銀熊賞受賞作品
チャン・ツイイー主演

中国華北の村にやって来た若い教師と彼に恋心を抱いた18歳の少女のラブ・ストーリー。



中国の山道を走る車。まわりは雪原だ。40歳の男が乗っている。父の死の知らせで故郷へ帰ってきたのだ。シネマスコープのワイド画面は白黒で、横の広がりがある。寒村に着くと村長が村で父親の葬式をしたいが、母親を説得してくれという。母は遠くの病院で亡くなった夫をその棺をかついでこの村へ連れて帰りたい。昔の風習に従った甲い方で「家路」を夫と歩きたいのだ。夫はこの村にできた小学校の最初の教師だった。棺を覆う布を今では誰も使わない織機で織り始める年老いた母親の背を見て、息子はその意志を母が貫くと感じる。部屋にある写真立て、そこには若い父と母がいる。その写真にカメラは近づき、息子が「村の伝説」となった若い父と母の出会いを語り始める。ここから、画面は、白黒からカラーへと変化する。

18歳の母と村にきた20歳の父の物語が田舎の四季のなかで綴られる。朗読の父の声が学校から村へ響く。朗読に吸い寄せられるように校庭に集う村人たちの光景。母は出てからずっと父の朗読を聞いて生きてきた。「……今と昔を知り、天と地を知る……」、この言葉は映画の最後では現在の息子によって朗読され、父が作った最初の教材の言葉だとわかる。知への渴望と信頼がある。知性のある映画だ。原題は「我的父親母親」「初恋の来た道」の日本語題もこの傑作にふさわしいものだ。人間が道を歩くことを描く。

監督は、「文化大革命」時代に農村へ「下放」された芸術家の一人「文革」後に映画への道を自ら切り開き映画カメラマンに、さらに「紅いコリヤン」で監督となる。この映画の前作が「あの子を探して」。やがて高倉健との映画も作る。日中映画人の交流がある。

(長住康博・仙台大志高校)

センターの動き

7月

1日 広島大学の女子大生が現代美術社の美術教科書の調査で春日さんに聴き取りのため来室。

3日 午前中、明日の不登校フォーラム準備。つうしん80号の原案検討。特集に「戦争と平和」が浮かぶ。

4日 午後、フォーラム「不登校」には29名の方が参加。教師養護教諭、大学教員などや保護者などいろいろな立場の方が参加。

7日 午後、宮城のついで事務局会。ホームページ更新。つうしん79号と、ゼミナール Study 企画のアップ。全国のついでフィールドワークの申し込みが全国から届き始める。

9日 仙台市総合教育会議を傍聴。

10日 スイミー講座のチラシ作成。午後、事務局会議。つうしん80号特集に、戦争と平和をテーマに名取北高演劇部と仙台工業模型部の高校生同士の座談会などを組み合わせるとまるとまる。

11日 『教育』を読む会。9名参加で冒頭の久富論文を読む。

15日 東北大職組、宮城大に「つうしん」を届ける。全国教育のついでフィールドワーク参加者申し込みFAXが次々届くようになる。

18日 みやぎ教育のついで実行委員会。

22日 午後は清岡さん、仙台市の教科書採択の臨時教育委員会傍聴。

23日 中森先生の「安倍教育改革」パンフレットを求めた東京の退職教員からお礼の手紙と10冊追加の依頼あり。これを機会に会員登録してくれる。ありがたい。午後、中森先生ほか、宮城大元教員が集まり、現在の安倍首相がすすめる安民法案反対の取り組みについて打ち合わせ。

仙台市臨時教育委員会、社会教科書決定。右翼的編纂の教科書不採用。運動の成果。

24日 午後、事務局会議。全国のついで「特設分科会」レポートに要綱や当日の連絡事項などの文書を発送。

27日 志津川中(前・戸倉中)の菊田先生と教息子の阿部さんの聞き取り。改めて戸倉地区は学校と地域が一体だったのだということ強く思う。

28日 フィールドワーク申し込み、バス1台分の定員45名に達する。

29日 清岡さん、臨時の仙台市教育委員会へ。内容は教科書採択の傍聴、書写、国語・数学・理科など採択。

31日 仙台市定例教育委員会。教科書最終決定。フィールドワーク参加者の対応。参加者に第二次案内文を作成・郵送。

(8月)

3日 夏休みスイミー講座。午前には堀籠拓さんによる多色刷り版画、午後はアロマテラピーの講座。多くの参加者が承認研修で参加。

5日 長住さんから早々に80号原稿「おすすめ映画」届く。

7日 全国のついでレポート原稿を印刷。

11日 宮城の会事務局会。

12日 数見先生(共同研究者)と

特設分科会の打ち合わせ。

15日 全国のついで前日。搬入分科会の用意、打ち合わせ実施。

16日 18日 全国教育のついで。初日はフォーラムを中心に会場業務を行う。2日目は、特設分科会の運営。3日目は被災地フィールドワークの引率。菊田先生に大変お世話になる。

20日 午前中は、物語作品・読みの講座の打ち合わせ。(春日さん、千葉さん、斎藤さん、渡部さん) 午後は、仙台工業の模型部、名取北高演劇部OBに来てもらった座談会。25日松尾さんから80号原稿届く。午後、第4回仙台市総合教育会議を傍聴。

26日 高校生座談会のテープ起こしを始める。夜、若い教師の学習会。参加者7名。

28日 別冊の執筆者の検討。9月の日程確認。

(9月)

6日 午前、道徳教育を考える(第5回)、修身教科書第4期を議論。8名参加。午後、仙台弁護士会主催「安民法案反対3000人集会」に雨中、3500名参加。

7日 哲学講座・ユートピア(下マス・モア)の歴史的考察に、目からうろこの学びとなる。

11日 大雨特別警報発令のため事務局会延期。市内、交通機関全面ストップ。

19日 採議院本会議「安民法案」強行採決。

21日 物語分の読みの講座に、若い教師の参加多く活気づく。

30日 つうしん、最後の原稿届く。(菅井)